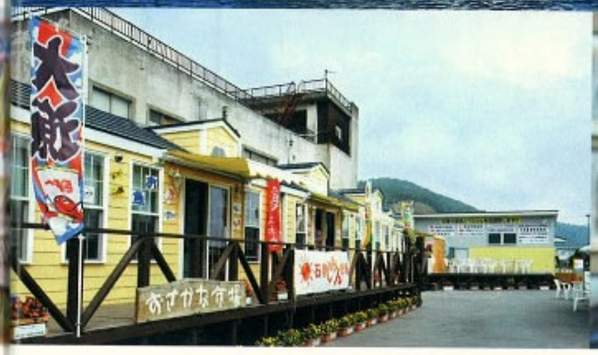
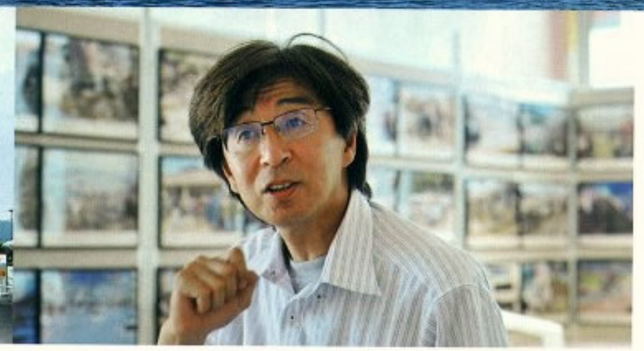
マルシェ内の石巻元気復興センター。地元の水産加工業者たちが力を合わせて、多彩なパック商品を展開している。明るい笑顔の店員さんたちの親切な説明を聞きながら、買い物を楽しむお客の姿も多く見られた

マルシェ内の石巻しみん市場では、捕れたての魚に新鮮な野菜といった、山海の豊かな恵みを感じられる品々が並ぶ。石巻は海の街であるだけでなく、農業の街でもあるのだ

石ノ森萬画館とのつながりは、マルシェ内にたたずむ仮面ライダー像からも感じられる。小さな子供たちが抱きつくことも

マルシェ内のスーパー「全日食きむら」。地元の人々に愛されてきた個人スーパーで、震災後も、市民の日常を支え続けている





上／石巻を流れる旧北上川の中州に位置する石ノ森萬画館。石巻まちなか復興マルシェの目の前にあり、石巻のシンボルとして愛されてきた。被災して休館していたが、年内には待望の再オープンを迎える。下左／石巻まちなか復興マルシェには、イートイン可能な広場や小さなステージもある。震災により空洞化が進む「まちなか」をよみがえらせる拠点として、活動を続けている。下右／街づくりまんぼうの副社長・尾形さん。自身もボランティアで石巻の街づくり、人づくりに奔走している

被災地だからと甘えない！ 石巻の集客拠点「復興マルシェ」

今回の訪問で印象的だったのは、いわば石巻の「地力」。地元の力を結集して、地元主導で難局を打開しようという意気に打たれた。

今年6月にオープンした仮設商店街「石巻まちなか復興マルシェ」も、そんな石巻パワーから生まれた。運営をリードする地元企業「街づくりまんぼう」の副社長・尾形和昭さんは、「『被災地だから』という甘えはありません」と胸を張る。「目指すは石巻観光の集客拠点ですから！」

石巻の観光拠点と聞いて、石ノ森萬画館を思い起こす人もいることだろう。街づくりまんぼうが運営を担い、宮城県が生んだ漫画の巨匠・石ノ森章太郎の創作理念を形にした、この地のランドマーク。国内はもちろん、海外から足を運ぶファンも数多い。

「マルシェ」という名の施設は、石ノ森萬画館がもたらした人の流れを増幅する戦略拠点として、実は震災前から企画されていた。抽選でテナントを選ぶ普通の仮設商店街とは一線を画し、代表者のやる気を何より重視したのも、その大いなる使命を踏まえてのことだ。

「目的は街に人を呼ぶことであって、自分たちだけが儲けられればいいのではない。そこを理解してくれることを大前提に、テナントは面接で選びました」（尾形さん）

● 石巻まちなか復興マルシェ
宮城県石巻市中央2-11-13
Tel: 0225-92-6603

郷土探訪
復興レポート

やりがい求める若者を集め「ボランティア定住化計画」進行中

全部で6軒のテナントのうち、まず注目したいのは「石巻元気復興センター」。水産加工会社を中心に、複数の被災企業が共同で開いた土産物店だ。カツオ節、笹かまぼこ、サバ味噌煮、カキの佃煮など、バラエティー豊かな石巻の味をパックした詰め合わせ商品が評判を呼んでいる。「生産設備を失った会社ばかりですから、どこも今作れるものは限られています。ならばそれらを束ねてはどうか、という発想から生まれた商品。石巻の魅力と底力を感じていただけるはずです」（尾形さん）。買い物スポットとしては、地の野菜と海産物を並べる、「石巻しみん市場」も要チェックだ。

ここを訪ねるのなら、飲食店にも入らないと後悔する。なかでもお薦めは、「石巻うまいもん屋」の海鮮丼だ。四季折々の海の幸をこれでもかと盛り込んだ豪快さで、多くのリピーターを集めている。

尾形さんと話しながら、え？と思ったのは、「被災景気はいつか終わるんです」という一言だった。皮肉なことに、震災で石巻の集客力は高まった。しかし、長くは続かないのだから、今のうちに手を打っておくべきなのだと、尾形さんは強調する。「マルシェ」とは別に進めている〝ボランティア定住化計画〟も、石巻の将来をにらんだ活性化策の一つだ。「ボランティアでこちらに来てくれた皆さんに、いっそこのまま定住したらと、働きかけています。ここに来て毎日が充実してるだろ、東京に帰ってこんなやりがいを感じることがあるかい、と言って」

誘いに応じてすでに50人ほどの若者が、石巻に住民票を移したとか。そんなふうに人を呼ぶ引力が、今の石巻には確かにある。

マルシェ内「石巻うまいもん屋」の海鮮丼。これでもか！　とたっぷりと載せられた海の幸に、石巻の水産業復興を祈る